



雲の上にはいつも...



【No.15】藤城小学校 校長室より（不定期刊）



蝉時雨(せみしぐれ)の中、汗を光らせながら登校する子どもたち。校門のサルスベリもようやく花を開き始めました。夏になつたら新型コロナウイルスの感染が弱まるのではという声もありましたが、どうやらそうではないようです。第2波を思わせる連日の新規感染者数の報道に、形のない不安だけが少しずつ積もっていくようです。

そんな中、今週で1学期が終わり夏休みに入ります。(京都市は23日間ありますが、少ないところは9日間。4日間だけという高校もあります。) 手洗いとマスクがあたりまえになった生活は維持(いじ)しつつ、4つの「とる」を意識して、8月1日からの今年だけの夏休みを味わってほしいと願っています。

※4つの「とる」…①人との距離を2㍍程度「とる」 ②(距離をとったら)マスクを「とる」
③水分を「とる」 ④しんどかったら休憩を「とる」



さて、「日本児童文学」という機関誌の中で、こんな詩↓に出会いました。



わたくさんのことばを知っているのに
心をつうじあえることばを
みつけられないのはなぜ？

ひとつのうた
おのえたかこ

ひぐらしは ひとつのはじましかしらない
さあ 一日がはじまるよ かなかなかな……
にわか雨がふるのかな かなかなかな……
雨があがつたみたいだよ かなかなかな……
きようはおしまい
おほしさまが見えるかな かなかなかな……
うれしいときも
かなしいときも
ひとつのことばで つうじあえる



夏の朝夕、哀調を帯びたヒグラシの声を耳にすることも少なくなった京都市内ですが、私が住んでいる奈良は自然が豊かなせいでしょう、朝の4時半頃(!)から「カナカナカナ……」の合唱が始まります。

確かにヒグラシは一つの言葉で通じ合っている。では、われわれ人間はどうなんだろう？親子で、あるいは周りの人たちと心を通じ合っているだろうか。

コロナ禍は私たちに「人と2㍍程度の距離をとる、小声でしゃべる、マスクを着ける」などを求めた。マスクについては相手の表情をわかりにくくし、声の微妙なニュアンスをも聞き取りづらくしている。感染防止のために、人と人とがますます遠ざけられているように思われて仕方ない。



心を通じ合えた瞬間を思い出してほしい。友人と、あるいは夫婦で、親子で心を通じ合えた瞬間を...。それは、思いを一つにした仲間と全身全霊を尽くしたあの瞬間。また、あふれそうな気持ちを抑えて手を握り合ったあの瞬間。多くの言葉を語るより、一つの言葉と互いのまなざしを確認するだけで通じ合った。わが子の子育てだってそうだ。ぐずるわが子を抱っこして寝かしつけたり、初めて笑ったときは「ちょっとお！ 今、名前呼んだら、私見て笑ったで！」と胸にかき抱きヨシヨシリ...。そんなふうに触れ合うことでわが子は安心し、やがて自分の意思で歩み出した。そう、通じ合うとはそういうこと。距離は近く、スキンシップも伴って...。しかし、今は「新しい生活様式」！ 



ならばどうすればいいのか。井上ひさしの『子どもにつたえる日本国憲法』という本の中に、こんな言葉があります。



（日本国憲法 第九条）「どんなもめごとも／筋道をたどって よく考えて／ことばの力をつくせば／かならず しる／よく考えぬかれたことばこそ／私たちのほんとうの力なのだ」

コロナ禍の中での夏休み。様々な制約とあふれかえる情報の中で、ストレスとコミュニケーション不足から起こるもめ事。誰だってもめ事は望まない。このようなときだからこそ、通じ合えることが大切だ。そのための「考え方」は嘘(うそ)のことば」、それは嘘(うそ)のことば、自分に嘘をつかないこと。口先だけの、その場をしのぐごまかしの言葉は使わないことだ。「考え方」が力を使くすことでわが子と、家族や友人との心を通じ合わせ、想像力を働かせて生き生きと、縮こまらずに過ごしていただきたい。8月24日の始業式の朝、晴れ晴れとした表情での登校を切に願う。